

回 覧



値小だより

島から日本一楽しい学校を
～子どもが未来に誇れる学校～

平成29年 7月10日 第8号

校長 酒井 元治

おじいちゃん、おばあちゃんに 負けないあいさつを

7月3日の校長講話より

先日、学校支援会議を行いました。学校支援会議とは、日頃学校がお世話になっている様々な団体等の代表者から構成され、学校が抱える様々な課題にご助言をいただいたり、逆に学校として地域に貢献することはないかなどを話し合ったりする会議です。本校では年回2回開催しています。先日の第1回目では、私が学校経営方針を説明し、「今年度はこんなことをがんばっていきます。ご協力をお願いします。」というようなことを話すのですが、その場で出された意見に「小値賀では高校生、中学生は地域でもよくあいさつするが、小学生はなかなか元気な声のあいさつが聞かれない。」というご意見をいただきました。これはこれまでも何度か聞かれたことです。

小学校には各学年の代表で組織し、学校としての課題を話し合ったり、自主的な取組を計画したりする代表委員会があるのですが、この会議でも子どもたちから「元気なあいさつができるようになるためにはどうすればよいか」についての課題提示があり、自分たちで話を進めました。その結果出されたアイデアは、朝から輪番で学年ごとに校門に立ち、あいさつ運動をしようというものでした。前述の学校支援会議に先立ち、校門前のあいさつ運動を開始していたところですが、やはりこれは校内のこと、なかなか地域でのあいさつに



は結びつきません。

そこで、7月3日に急遽全校朝会を行い、私があいさつについてプレゼンをしながら話したり、わかめ班（縦割り班）で話し合わせたりしました。（これも、前お話ししたわいわいミーティングです。）

まず、「今、みんなはあいさつ運動をがんばっているよね。どう？今日登校の途中に会った地域の人たちに元気なあいさつができたって人はどれくらいいるかな？」と手を挙げさせると、だいたい1/3程度。「じゃあ、地域のおじちゃんやおばちゃんたちにも元気なあいさつができないのはどうしてだろう？」と問いかけ、わかめ班で2分ほど話し合わせてみました。その後発表させると、出てきたのは次のような理由です。

- ・はずかしい感じがする。
- ・学校では知っている先生や友だちだけど、地域には知らない人もいる。
- ・小学生全員がやっているわけではない。

「じゃあ、地域でも元気なあいさつができるようにするためにはどうすればいい？」と、これまたわかめ班で話し合わせてみました。出てきたのは、

- ・家を出る前に声出しの練習をする。
- ・思いっきり大きな声を出す。

などです。解決策には、即効性のあるアイデアは出されませんでした。それは私も予想していたことです。だって、元気なあいさつができるかどうかは、心の有り様（意識）と周囲の雰囲気の問題だからです。

そこで、大人になってもあいさつは大切であることを話しました。会社に入ってからあいさつは仕事の一部です。「すみません。」が言えない若者が増えているというのも話し、ある企業の研修の様子を動画で見せました。動画では、おじぎの仕方から声の出し方を何度も繰り返し練習しています。「みんなが会社に入ったときに必要だから…」というのは、あいさつ本来の意味とはちょっと違うような気がするのですが、元気なあいさつ、美しい礼儀は一生の宝だと思います。

さらに、あいさつ本来の意味を感じてもらおうと思い、高田宏氏の「島で見たことから」を紹介しました。

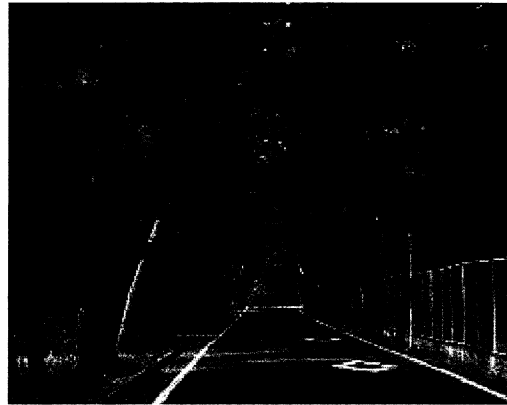


「島で見たことから」は、昭和60年前後の中学校1年生の国語の教科書に掲載されていたエッセイです。小値賀中学校でも使われていた教科書です。前中学校長の永松校長先生が昨年値中だよりで紹介されたので、記憶に新しい方もいらっしゃるかもしれませんが、改めて一部分を紹介します。

島で 見たことから

高田 宏

五島列島の小値賀島へ行ったときのことである。小学校の前のみごとな松並木を歩いていたら、道の向こう側を連れだってやってきた2、3年生くらいの男の子と女の子がこちらに向かっていねいなあいさつをした。腰を折るおじぎをして、「こんにちは。」と口をそろえて言う。大きな明るい声だった。一瞬、返事を返すのがおくれた。私に向かってのあいさつとわからなかったのだ。だが、周りに人はいなかった。私はあわてて「こんにちは。」を返した。



小値賀のあちらこちらでそうだった。見知らぬ旅行者の私に、ていねいなあいさつであった。たばこを買いに立ち寄った小さな雑貨屋では、一個買っただけの私に、おばあさんが腰を折り両手をひざにそろえて、「ありがとうございます。」と頭を下げた。このときも私は大あわてでおじぎを返したのだったが、小値賀にいる間じゅう、おばあさんのあいさつを思い出して気持ちよかったものである。あのおばあさんの温かい笑顔は今も目に残っている。

見知らぬどうしが大勢の都会では、道で会う人みんなにあいさつするわけにはいかないし、商店の人がいちいちていねいなあいさつをしていたのでは商売にならないだろう。だが、小さな島や山間の村など行くと、あいさつというものがきちんと生きている。形だけ残っているというのではなくて、あいさつというものを自然に生み出す生き方が伝えられている。

これが、教科書の原文の半分ほどです。なんと、全国で小値賀のあいさつのことを題材に学習していたなんてびっくりです。

この朝会の時間で、「ようし、あいさつがんばってみよう。」という気になった子どもがどれくらいいたかはわかりませんが、それでもいきなりできるようになるものではありません。高田宏さんが感じてくださったようなあいさつを子どもたちが身につけるまで、保護者や地域の方のご協力をお願いします。

ワールドワイドな小値賀小!

みなさんご存じのように、小3と中3合同の取組「アジかまぼこ作り」にテレビ取材が入りました。タレントとしてはアンガールズの田中さん。折しもこの日は、「ワールドゲスト」が2人。スウェーデンからジョセフィーヌ先生とデンマークからルイス先生です。なんと北欧からのお客様。活動の前に3人（アンガールズの田中先生を含む）を紹介。北欧のお二人に続いて「出身は広島です。今日は東京から来ました。田中です。」と田中先生も自己紹介をしました。



今回はテレビスタッフが14人もいる中で、小中共に人数の多い学年だったために、狭い調理室がごった返す感じになりました。



ワールドゲストのお二人も包丁を持ってアジを3枚に下ろしていました。お互い言葉が通じない中で、何かを伝えたり一緒に行動したりしようとする子どもたち、いろいろな子がいて当たり前、年の違う子と活動して当たり前、外国の人が当たり前にいる学校、おまけに、今回は当たり前じゃないタレントとテレビカメラまで。社会性を培うのになんてバッチリな環境なのでしょう。なんともワールドワイドな活動になりました。テレビ放映は29日(土)だそうです。お楽しみに。(肖像権の関係で、田中先生の画像は今のところ学校だよりでは使えません。ご了承ください。)

さらには、現在1年生にオーストラリアから松崎永実さん、6年生にフランスから近藤望鈴さんが体験入学中です。さらにワールドワイドな小値賀小です。